

学校給食と「あまにゅう」

学校給食用の牛乳は、昭和39年からは尼崎牛乳事業協同組合(あまにゅう)によって各学校に納入されました。当初は組合に属する各社が、独自のデザインの瓶やキャップで供給していました。しかし、昭和55年に早野牧場が廃業したことで、デザイン統一の機運が高まり、昭和60年には牛乳箱、瓶、キャップのデザインと名称(尼崎牛乳)を揃えました。その際、給食用と市販用の混合を防ぐため、前者の瓶は青、後者は緑にしました。発足当時は5社で結成した組合も次々と各社が廃業し、とうとう昭和牛乳1社のみになってしまいました。そこで平成25年度をもって、事業停止・解散の運びとなりました。(法人としての名前は存続)



給食用(青)

市販用(緑)

契約業者名が組合から昭和乳業に変わったため、デザインや名称も変更を迫られました。本当は「尼崎」というネーミングを残したかったのですが、食品表示の法律に係っては尼崎産でなければ製品名に使用できないためです。(これまで「尼崎」が使えたのは、組合名に入れていたから)よってやむを得ず「昭和乳業」の名の入った瓶になりました。

さて、原乳の大部分を熊本からの調達に頼っていた給食用牛乳ですが、県内生産・消費の推進の下、平成5年ごろから兵庫県産に切り替わりました。現在では100%淡路島産の生乳を使用しています。



瓶もキャップも「昭和牛乳」に表記変更

夏休みや冬休みは、給食用牛乳の出荷が止まります。また、乳牛も、暑い夏は冬に比して、生産量が低下します。よって、生産も消費も一定ではありません。そこで、チーズやクリームのような加工に回す量を増減しながら調整し、給食用牛乳を安定供給しています。また、県全体で供給ネットワーク(組合)を構築し、原乳の納入価格も一元化しています。このような工夫をすることで、山間部の学校や震災などの非常時においても、安定した価格と供給ができるのです。

県内唯一の給食用瓶牛乳

牛乳も昔は瓶が当たり前でしたが、次第に紙パックに切り替えられ、県内では尼崎市だけが瓶となってしまいました。ビンには洗浄にかかる機械や人件費などコストや手間がかさみます。輸送も軽量の紙パックの方がいい。さらに、紙は子どもが運搬する際にも軽くて割れないといった利点があります。それでも尼崎が瓶にこだわるのは、おいしく飲めるからです。紙パックでは、飲むというよりもストローで吸う感じです。牛乳の美味しさは飲みごたえや喉越しです。紙臭さのない瓶の使用は牛乳嫌いの子を少なくしたり、おいしさをしっかり味わう食生活に関わって大事としたい所です。さらに瓶は、環境により優しいです。瓶は回収、洗浄、殺菌され再利用されます。(リターナブル)加えて、古くなった瓶については、リサイクルされ新しい分に生まれ変わります。紙パックもリサイクルされますが、リターナブルとリサイクルの両方ができる瓶のほうが、はるかに資源節約となるのです。

牛乳キャップのミミは…

昭和乳業の牛乳瓶のキャップにはミミがついています。ミミが大きいとその隙間から雑菌が入り、牛乳の保ちが悪くなります。よって、一般的にはミミ無しのほうが多いです。しかし、ミミ無しだと開けるため針のついた器具が必要となるので、尼崎ではミミ付きを採用しています。ミミの大きさや形状は、衛生面と開けやすさのバランスをよく考えて設計しています。

普段何気なく飲んでいる給食用の瓶牛乳にも、環境面や味わい、衛生管理など、随所にきめ細やかな工夫や配慮がされているのです。紆余曲折の歴史や関わる人々の労苦を知る時、給食の瓶牛乳はさらに味わい深くなることでしょう。

参考資料：①ビンに込められた「教育」への思い(昭和乳業)②地域史研究No.115 尼崎市立地域研究史料館「尼崎牛乳について」(溝下順一)

